

適當な言葉を見出すに苦んだから、同じ言葉を再びつぶやいた。女は無言のまゝそつとわたくしの手を執つた。わたくしは女の眉根の蒼白く動くのを見成つてゐたが、女はまたわたくしの耳に口を寄せてさゝやいた。わたくしはこの時齒の痛みを刺す劇薬の冷さを感じた。

わたしは慌てゝ引返した。女が後から跟いて來たか、どうか、それを知る暇もなかつたが、女の冷いさゝやきは全くわたくしの心を焼いて了つた。そして女の媚の經卷をわたくしは絶えず巻きかへした。金地に青の文字をしるした經卷である。

本船に還つて間もなく日が暮れて、落つきのない夜が來た。わたくしは平靜を詐り裝つて、黄く熟んだ燈火の下に身動きもせず坐してゐた。船はまた航海を續けた。わたくしはこの夜を徹して燈火の光を見つめながら、かの蛋白石と紅寶玉と翡翠とを連ねた藝の珠數を爪操りつゝ、人魚とサイレンの宗教の秘義に參じようとつとめたけれども、この怪しい女の手の壓迫が今もなほわたくしの掌に残つてゐて、頻りに悔恨の情をそゝつたので、わたくしの凝念は絶えず亂されてゐた。

海上の夜が明けた。汽笛は鈍い聲で吼えた。その聲に混つて、けたたましい鋭い赤

兒の叫聲が聞えた。灰色の輪廓をもつた一群の船客は總立となつて甲板に現はれた。船はこの朝最後の目的地に到着するのである。踏み躪らるゝやうな赤兒の泣聲がまた聞えて來た。

氣味の悪い眼をもつた船客の一人が、

『あの赤兒は誰が世話するのだ。』と言つた。

他の一人はわたくしの顔をじろく見つめて、

『昨日の晩方あなたはある女の方と一緒にこの前の港で上陸されたことがあるでせう。』と言つた。

『それが何だ。』と、言はうとする間もあらせず、他の一人が、

『それからあなたはその女の手を握つたでせう。』と、せせら笑つた。

『その女は何處にゐる。』わたくしはかう問ひかへさうと思つたか、赤兒の聲が急に微かになつたので、その方に耳を傾けると、泣聲は波の底から聞えてゐた。

紺青の海の底から沸々と赤兒の泣聲が浮んで來る。そしてわたくしはその聲を聞いて、擦らるゝやうな戯謔の快感を覺えた。

魂の法會

理髮店といへば直に幼いをりに伴れられて行くのを厭がつた記憶が浮ぶ。いくつの齡であつたか、今ではおぼえのないほど遠いおぼろの影の中から、その日、その時の理髮店に飾つてあつた一鉢の花が心の眼に映る。物の象や人の顔がおぼつかないに淡々と現はれて来ては、いつしか音もなく消えてゆくその中で、急に烈しい夏の日の光が顔へるかと思ふ一瞬に、白く輝いて生れいづる手弱女の面ざしそのままの花——それは百合の花である。

花にも魂があつて、ふとした機會に人の魂と相結ぶ。花はその時から美はしく脆い姿をとこしへの印象に代へて、人の魂の奥に宿るのであらうか。人はそれを憶ひ起す何時でも、いひしらぬ歡びを感じることが出来よう。花の魂は人間に最も親しい「自然」のちからである。かの日に理髮店に飾つてあつた一鉢の百合の花も、わが魂の中

に移されて、その褐色の斑點が今もなほ鮮かな星のやうに見え、曾て風に轉じた花瓣が或る秘密の天體のやうに緩やかにその上を覆ふてゐる。

この百合の花が憶ひ起されると同時に、その理髮店の内部のさまがほのかな夢かとはかりに浮かんで来る。そこには水銀の海を延べた姿見が碧く曇りを帯びてゐる。魂を取りまきつつ、深くそして感じの鋭さを示してゐる雰圍氣を透して、この朧ろげな鏡に對ふ時、——その刹那に恐らくは百年の運命が映つてゐよう。

幼時の面影——それは一生のすがたでなくて何であらう。それに對して懐しさをおぼえると共にひそかに恐怖の念を抱かぬものが果して幾人あらうか。

兎まれ角まれ、昔のみすぼらしい理髮店の姿見が、今しも傳奇的な幾百の燐光を放つ魚の眼をただよはすかと思ふ間に、黄金の霧が一面にかかつて来る。金磨きにした鏡の厚縁が、明るい霧か飛沫のやうに蒸して、その中から深く刻んだ唐草模様様が海の藻の葉のやうに流れて見える。

遽かに不快なおもひが何物をか避けようとする。曾ておぼえた本能の衝動が今もなほその名残の警めを叫ぶ。かくて遂に避くべからざるものの手がわが身を捉へるので

ある。身動きもならぬ幼い姿が鏡の中に銀灰色に顛へつつ、その底に抑へつけられた惱ましさを藏してゐる。見ればまたその後方に立つ人のすがた、——片手には研ぎすました剃刀、その刃のほひが稻妻のやうに閃めく。すべてが聲もない泣きどよみを作つて、すべてが掻き亂される。……

百合の花と剃刀と、その間に「我」といふものが介まれてゐる。その間に不可思議な親和力がある。静かな花の匂ひに剃刀を研ぐ鈍い音がまじはる。かなたには切な慕はしい念、こなたには常に不安な念。さてはまたその百合の花は何であらう、剃刀は何であらう、剃刀を研ぐ手は何であらう。しかもその剃刀を研ぐ同じ手が一鉢の百合の花に養ひの水をそそぐのである。この矛盾の極と極とが相結ぶ環の中心に當つて息ざし深く宿るもの——これがわが「魂」である。この環の世界が即ち運命の世界であらう。

自然や人生の表面は餘りに雑駁なので、人はその雑駁に慣れて、むしろ制せられて、そこに矛盾があつても、(嗚呼、世の中の事はすべて矛盾ならぬはない。)それを矛盾と思はなくなつて來た。智識が既にこれを整理した筈に決めてゐる。しかも一見些細な

矛盾でも、えてまたさういふ矛盾が、思ひもかけぬ調和を、即ち物の眞髓を折々人にしめすことがある。

わたくしは今朝からさまざまな書物やさまざまな思想に觸れて、何の興味もなく徒らに感情を麻痺させた結果、しきりに悩む頭をかかへて、近所の理髪店に行くことにした。

寒い暗い夜である。外方の寒さに内側に曇りを吹いた理髪店の玻璃戸は、瓦斯の光を温かに心地よく籠めてゐた。わたくしは無言のまま、いつもの椅子に——折から外に客もなかつたので——就いた。慣れた座は王座のやうである。

不圖前を見るその途端に、鏡の奥から靜に輝き動くものが迫つて來るやうに思はれた。それは銀灰色の顛動であつたが、その背後から暗い影が忽ちにこれを掩ひ去つた。幼時の面影はここに閃めいて、また滅えた。わたくしは仰向になつて、頭を椅子に當ててゐると、急に疲れをおぼえて、をのづから眼瞼が閉ぢられた。魂がまるで瓦斯の光に吸ひ取られでもしたやうに、ただ暗く寂しい胸の中をさまざまな遊離された思想

が忍び足で過ぎて行つた。

剃刀を研ぐ音が睡たげにひびく……

わたくしはその間うつらうつらとしてゐると、忽ちわたくしの頬のあたりを、研きすました剃刀の切味が、ひと撫で、そよ風のやうに掠め去つた。呼び醒された感覚みづからが、疲れて飢ゑた感覚を饜かさうとして、その危険を忘れた一瞬時——その感覚の振動の圖がうるはしい模様を描いた。そして最後にそれが百合の花の匂ひを放つた。

そこらの空椅子には二三人の少女が集つて取りとめもないことを話し合つてゐた。その口振から察するにまだ四五歳ぐらゐの少女であらう。わたくしは今その姿を見ることは出来ない。わたくしは仰向になつたまゝ、眼を閉ぢたまゝ、その話しごゑに耳を傾けてゐたが、何時の間にか不思議にも静まりかへつたかと思ふと、その少女の中の唯一人が極めて緩やかな調子で唱ひ出した。

「東郷さん——乃木さん——河村さん——奥さん——野津さん——(すこし途絶えて)——黒木さん——」

少女は思ひ出すままに、この度の戦争に勇しい名を馳せた將軍の名を數へ來り數へ去るのだ。

さしもの戦争もこの少女のこの緩やかな満足な調子の中に激しい活動の夢をとこしへの平和につつんでゐる。——無意識に、偶然に、そして極めて必然に、魂の鏡に映じた過去の事柄を、誰かこのやうに満足に數へ得るであらう。若しまた數へ得るものがあれば、それは我等の魂みづからであらねばなるぬ。魂の法會に魂の鐘樓から鳴りわたる鐘の聲——その聲を耳にして、不注意と邂逅によつて、空しくも逸し去つた過去の、些細な、しかも重要な事柄を憶ひ起し得るならば、いかに歲月は意味あるものとならうか、いかに生活は根ざし深いものとならうか。

少女は緩い調子でまた繰りかへした。

「東郷さん——乃木さん——河村さん——野津さん——黒木さん——」

わたくしにはそれが際限もない歌のやうに聞きなされるのである。

わたくしはその少女の無邪氣な顔を一目見て、更に満足を味いたかつた。然しながら、この時、わたくしの體は危険な刃物の下に身動きさへすることは叶はなかつた。

わたくしは實現の出來ぬ欲望に渴しながら、いろいろに考へて見た。その少女はそもそも何處から來て、わたくしの傍に座を占めたのか、座を占めて何の爲に勇將の名を唱へはじめたのか。身動きもならぬわたくしに取つて、その少女は何とはなく不可思議の存在と思はれるのである。そしてその少女は……

氣がつくと、讃歌の聲はいつしか絶えてゐた。少女の存在は果してどうなつたのであらう。わたくしは胸の鼓動の高くなるのをおぼえた。少女は沈黙して、更に近くこの胸の中にその座を移したのではなからうか。少女の胸におぼえる鼓動そのまま、この胸の鼓動となつたのではなからうか。

沈黙の懸鐘が幽かに揺れてゐる。——音もなく、影もなく。

この時また水甕に——恐らくは研場のであらう、それはどうであらうと、その水甕に滴り落ちる水の音が間を隔いて聞えはじめた。——さまざまな音色がさまざまな思ひを奏でてゐる。

最後に一雫がいとど澄んで落ちた。

わたくしの魂の海はその活きた眞珠の一雫を貪り吸つた。

世相

わたくしは何事を思ふともなく、いつものところから、いつもの通り電車に乗つた。

——わたくしの頭には、この時、雑駁な空虚があるのみであつた。

日毎に、また年毎に、都會はその紛雜を加へてゆく。狂奔の吐息と嬌飾の匂ひとが混り合つて、蒸し苦しい人香のいきれが鼻を撲つ。その光景を一々に觀れば極めて不自然な姿であるが、しかもそれを全體として、感觸するがままに、この不自然を自然に觀れば、その紛雜と眼まぐるしさの中に調和がある。さまざまな流行の衣の色や、さまざまな香油のかをりや、さまざまな響が一つになつて神經を刺戟する間にも或る印象が残る、——音の赤い斑点や、香の緑の斑点が疲れた眼の前を浮動する——すべての現象がすべての感觸の綜合なる一の情調の中に没してしまふ——そこに極めて痛切なる人生の哀樂の圖が生れる。

わたくしの空虚な頭はいつしか斯ういふことを想念しつつあつたが、わたくしは矢張その雑駁さに堪へきれなかつた。それでまた考へることを止めてしまつた。

わたくしの乗つた電車は幸ひ勢ひよく走つた。今しも大通りの並木の柳を緑の雲のやうに窓玻璃の外に靡かせつつ、その切目切目から、商店の軒に掲げられた招牌の形や色や意匠のかすかすが閉めき且つ消えてゆくあわただしさを開展しつつ、快く速度を早めてゐた。

わたくしは眼を車内の人に轉じた。互に押し合つて窮屈を忍ぶ平凡な乗客のなかに、緒ら顔に並ぶ色白の女の顔の半面が、ふとわたくしの心を率いた。その顔は無言の不安そのものであつた。それか習慣になつて残つてゐる媚の中から滲み出てゐるやうに思はれた。わたくしがさう思つて見てゐると、電車が急にすさまじい震動を起した。その途端に、色白の女の眼と緒ら顔の男の眼とが激しく動搖する空間で打重り入れ交るやうに見えた。併しこの不測に起つた感覺の戲謔を、わたくしはそれかと思ふ隙さへなかつた。

電車ははたと停つた。乗客の一人が窓から首を出して、「犬がひかれそこなつたのだ」

と云つた。

他の乗客がこの説明を聞いて安心した如く、わたくしもまた安心した。そして「ひかれそこなつた犬」のことなどはすつかり忘れてしまつた。

わたくしは兎に角安心して、今度は隣席の老婆に眼を向けた。六十路ぐらゐの、頬の皺のすこしたるんだ老婆である。その顔には世帯の苦勞を通り越して、やつと今日の安心を得たおもかげが、現在の平和の夢につつまれながら深く刻みつけられてゐる。細かな年寄によくある少し窪んで衰へた小さな眼が、古風な鼈甲縁の眼鏡の下でしばだたいてゐる。そして手垢のついた小形の書物を膝の上に載せて、そのこまかい活字の印刷面を一心に見入つてゐる。

老婆は身じろぎもせぬ。その手にする書物は印刷の體裁からそれとすぐわかる「聖書」であつた。その「聖書」にはまた單に手擦れの痕がしめされてあるばかりでなく、毎篇の標目が細く切つた厚紙にしたためられて、丹念にその小口のところに上から下へと貼りつけられてある。これだけ見てもこの老婆の平生の心づくしがよく判る。そしてその標目の文字はすべて平假名で、たとへば「るつ」、「えれみあ」——書體がま

た見事である。

老婆がしきりに見入つてゐるところは「馬太傳」中の一章であつた。その熱心さは、さしむかひに腰かけてゐた少女までが誘ひ込まれて、やや好奇のこもちから、伸身のびみになつて、老婆の様子をほほゑみながら窺つてゐた。無作法な車掌が、これもまた何んと思つたか、乗車券を切りに通過する時、ちよつとさし覗かうとすると、銅貨で重くなつた鞆が前にすれたので、あわてて肩を揺り上げた。

老婆は矢張身じろぎもせぬ……

わたくしは電車を乗り換へた。新らしい顔がわたくしを黙つて迎へた。最後にこの車に乗り込んだものは見苦しい女房に手をひかれた盲目めくらの尺八ふきであつた。

尺八ふきの女房は、だらしない乳呑兒ちやうごを負つてゐたが、その上にも七つ八つになる「餓鬼」まで伴れてゐた。垢びかりのする袷の胸がはだけて、汗と膏によこれた乳のあたりがあらはに見える。

盲目の尺八ふきは、唯おどおどとして瘦せぎすな體をすぼめて腰をおろした。頬のこけた、顔のいろの黒すんで蒼みを帯びた、神経質らしい男である。

その男の濁つた眼が、ぎろりと動く——彼は何を思つてゐるのであらう。そして天鷲絨の袋に入れた尺八を堅く締めた帯に挿して、これは女房のであらう、襤褸れんじに包んだ三味線を大事さうに抱へて、その棹のところを軽く右の肩に當ててゐた。

折から雲に焼けた夕日が不意に射して、向側の乗客の顔を氣味わるく撫でるやうに染めた。蒼さめた尺八ふきのこけた頬が忽ち朱をそいで浮び出で、濁つた眼がまたぎろりと動く、と思ふ間もなく、朱の色は減えて暗くなつた。

彼は恐らく藝に魂をこめる——そのやうな機會が果してあるだらうか——その一瞬に眞の安慰を得ることもあらう。しかしながら安慰は短く、減えて、生計の苦が長くつづく。身は疲れ、魂は削られる。彼は今何を思ひつめてゐるのであらう。

深く籠つた尺八の音が聞えて来る、(わたくしには自然に、それは空想でなく、その音色が聞えてくるやうに思はれた。)尺八の曲節は始め肉の惱みに顫へたが、いよいよ妙境に入ると共に彼は何物をも忘れ去る。女房の弾く三味線の調子が、この時から、どうしたものか合はなくなる。撥音が、やけに狂ふ……

するとまた小兒のぢれて泣く聲がする。

わたしは空想から呼びさまされた。尺八ふきの女房は負つてゐる乳呑兒に泣き出されて、いらいらしてゐる。

泣く兒の兄の「餓鬼」は三四席前の方で、後ろ向きになつて、物珍しさうに外方おもてをながめながら、窓玻璃をかたがたさしてゐたので、女房は卑しい濁み聲で、

「これ、そんなことをしないで、こつちに來な、悪戯わづらをするなよ。」と、いきなり叱りつけた。

「うむ、おつ母あ、何にもしてはゐねえよ。」彼はまた彼れで、狡猾すねさうな、それでゐて元氣のない聲で言ひ返した。

わたくしは急に一日の疲勞をおぼえると同時に、その全身にわたる疲勞が味氣ない溜息をつくのをしみじみと聞いた。

常世鈔 翻譯

向日葵

キリアム・ブレエク

ああ向日葵や、日のあゆみ
ひねもす數へ待ちつけて、
天路の涯にありといふ
黄金の邦にあこがるる。

恨み亡せつる若人も、
栲のかけ衣つけし子も、
墓より出でて尋めゆかむ、
わが向日葵のねがふ常世を。

述懐

ヲルタア・サエエジ・ランドル

争はざりき争ふも益なき世や、
愛でしは「自然」、次にまた「藝術」をも。
雙手命の火にかざし温めしかど、
火ぞ沈む、噫、何時とともかしまだたむ。

地の歌

ジョン・キイツ

「地」歌さらに絶ゆべしとも思ほえず
 小禽は熱き日に弛み涼しき蔭の
 樹の間尋め隠れゆく時聲はたつ、
 墻より墻に新刈の牧の野原を。
 こは、あはれ鳴く蝻斯豊の日の
 夏の宴に先だつは、おのがままなる
 享樂の爲めにはあらし疲れぬれば
 心やすくも青草の下にやすらふ。

「地」の歌いつ盡きてしもありなむや、
 寂しき冬の或る宵を沈黙もたらす
 夕凍みの折も折とて爐のほとり、
 温もりゆけばすすどくも蟋蟀は歌ふ、
 夢ごこち聞き惚れぬれば、きりぎりす
 草山かけのそのかみの聲にまぎれて。

明星

ジョン・キイツ

67
 明星よ、汝が變らぬ操にぞわれは肖えなむ、
 寂しくも獨り離れて夜の空に輝きわたり、
 精進の力ゆゆしく、まどろまぬ「自然」の行者、

その如も堅磐の險睨きて、うち目成らふは、
 現し世の人住む礎回めぐりつつ穢れ洗ふと、
 聖めき、袂ぎ被ひて勤しめる海を行ひ、
 或はまた、廣野が面を、山々のその嶺を、
 うち掩ひ装ひなせる初雪の清きながめぞ、――

さながらに、なほも操に、なほもまた變ることなく、
 麗はしく、蕩たき君がふくよかの胸を枕ぎ、
 柔らげるその起伏の浪だちを常久に觸れ、
 美しかる惱ましさもて常久に瞬ぎもせで、
 なほも、なほも、君が優しき息ざしを聞きてあらなむ、
 さて夢に死ぬともよしや、わが心うつらうつらと、

「ルバイヤツト」より

其一

泥沙坡とよ、巴比崙よ、花の都に住みぬとも、
 よしや酌むその杯は甘しとて、はた苦しとて、
 絶間あらせず、命の酒はうちしたみ、
 命の葉もぞ散りゆかむ、一葉一葉に。

朝毎に百千の薔薇は咲きもせめ、
 げに、さもあらめ、昨日の薔薇の影いづこ、
 初夏月は薔薇をこそ咲かせもすらめ、ヤムシイド、
 カイコバアドの尊らのみ命をすら惜しまじを。

逝くものは逝かしめよ、カイコバアドの大尊、
 カイコスル彦、何はあれ、
 丈夫ツアルも、ルスツムも、誇らば誇れ、
 ハチム王宴ひらけよ、——そも何ぞ。

畑につづける牧草の野を、いざたまへ、
 その野こえ、行て沙原、そこにしも、
 王は、穢多はのけじめなし、
 金の座にあぐらしたまへ、マアムウド。

歌のひと巻樹のもとに、
 美酒のもたひ、饅頭の山、
 さては汝がいつも歌ひてあらばとよ、

その沙原に、そや、沙原もまたの天國、

其二

賢し教に智慧の種子播きそめしより、
 われとわが手もておふしぬ、さていかに、
 收穫どきの足穂はと、問はばかくのみ、——
 「水のごとわれは來ぬ風のごとわれぞ逝く。」

海邊の墓

クリスチナ・ロセチ

花薔薇ここにかけず、

荆棘さへ問ひも浮べず
 麥刈の穂積に寄りそひ、
 刈り疲れ、まどろむがごと、
 しかあらむ、われも朝まで。

臘月の凍てにあやかり、
 往にし日の返らぬさまに、
 かくてあるも、唯一人のみ、
 他しびと忘れはつれど、
 その一人、われを偲び出づ。

宿 縁

ダンテ・ガブリエル・ロセチ

そのかみ、ここにはありけむ、
 いつぞ、いかにと語りあへねど、
 さながらなりや、野べの草生、
 鋭き美し薫り、
 咲く浪の音、磯めぐる燈火のかけ、

そのかみ、君をも知りけむ、
 いつの世ぞとはえもわかねども、
 誘ふ燕に、頸を、君、

廻らしたまふに、
ふと憶ひいづ、——それは昔われこそ見つれ。

そのかみ、かくてもありけむ、
うづまく「時」の過がひゆく間を、
二人が戀は、また身に添ひ、
朽ちまじと、さては、
夜も日もおなじ歡びに還れるや、いさ。

愛のまなざし

ダンテ・ガブリエル・ロセチ

我は何時いとよく君を見もわかむ、わが愛づる君、

眞晝時雙の瞳の神壇とたぐへもすべき
君が面のまのあたりにぞ跪き、君を頼めて
知りそめし「愛」を齎きて讚め稱へありなむをりか。
或はまた彼誰時に、(ただ二人他も交へず。)
對ひゐて、ひたと口づけ、その無言忠に物言ひ、
薄明り朧々に寄り添へる愛しきみ姿、
わが魂の獨り正しく君が魂見てあらむをりか。

あはれ、わが戀ふる君はや、いつかまた君を見ぬ日の、——
現世に、げにいつしかとゆかしめる影は隠るひ、
眞清水の池にその眼の映るはぬ日の來りせば、
暗まざる「命」の丘のなだれゆくそが上にして、
辻巻ていかに噪がむ滅びぬる「望」の落葉、
えも滅び果ざる「死」のうち羽ぶく風のしまきに。

希望

ダンテ・ガブリエル・ロセチ

空しかる「願ひ」は遂に空しかる「悔」と携へ、
 死の途だとり往にてぞ押並べて空しかる時、
 いとせめて忘れ難なる痛みをば何か慰め、
 はたやその忘れがたなに忘れよと誰か教へむ。
 「やすらぎ」はかの隠れ水めぐり遇ふ折もあらぬか、
 請ひ禱める魂は直ちに縁なす廣野を尋めて、
 湧き出る美し命の眞清水のしぶき厭はず、
 露しと濡れたる花の護符をば手折てもあらむ？

あなあはれ、着める魂は、聖經の文字を綴りて
 花瓣の咲き匂ひぬる、そが中の黄金の空に、
 判き難き豊の恵みを息づみて頼めうかがふ、
 あはれ、今、あだし秘密の陀羅尼をばなどか求めむ、
 しかすがに一つ「望」の一つ名のそれだにあらば、
 さもあらば、すべて足はむ、ひとりその言の葉のみぞ。

「エニスの牧歌」

ダンテ・ガブリエル・ロセチ

日永の夏至を水は今その物倦じ、——さりげなく、
 甕を浸せ、徐に、——またさりげなく耳かしげ、
 聞てあれかし、その縁にうち啣ちつつ忍び入る、

波の嘆きを。こころせよ、青淵ふかき水の底、
 曉がたを音もなく日の熱さこそ籠りぬれ、
 今し手をおく井オロンの絃は顛へて啜り泣き、
 咽ぶや、あはれ歡樂の極みに物は悲しくて、
 稍色づける面の主ら歌ふを止めぬ、かの君の
 眼はいづらをばさ迷へる唇すべる細き笛
 吹きさし棄つる折からを、素膚の胸にうち撓ひ、
 がげろふ草の葉も涼し、さてしも斯くてあらしめよ、――
 物をな問ひそ、かの君に、かの君こそは泣きもせめ、
 かくとな告げそ何時までも、有が隨にしあらしめよ、――
 「不滅」の生と語らひて口觸れあへるその命。

聖 燈

ダンテ・ガブリエル・ロセチ

深き眞書をフランドルの鄙の道のべ、
 いつきたる小き籠の傍へ過ぎ、
 窺へば懸けつらねたる晝の中に、
 聖母は御子の寝すがたを擁きたまへり。
 羊を飼へる乙女らは羊さし措き、
 晴れし日の謝恩やここにひさまづく、
 はたや日の夕もここにひさまづく、
 悲しき宿世泣きなむも、はたまたここに。

静
晝

ダンテ・ガブリエル・ロセチ

緑の草の中にしも腕を君が擲げやれば、
 を指の尖のほの透きて色づく花と擬ふかな——
 和し微笑む君が目見。散りては更に寄せ來なる
 雲の波だつ空の下に照りては陰る牧の原。
 二人巢籠るこのほとり眼路の限りは押並べて
 黄金の花の毛茸野末の線は白銀に、
 犬芹生ふる山楂子の垣根の端に連なりぬ、
 げに静けさの眼にも見えて、漏刻のごと蕭やかに。

日影も忍ぶ草がくれ、蜻蛉はひとりみ空より
 解けにし藍の一條の絲かとはかり懸りたる、——
 「時」の廻もその如く二人が上に休らひぬ。
 ああ、打寄せむ胸と胸、これや變らぬ珍寶、
 美し契の濃やかにたとしへもなきこの刻、
 二重に合へる静けさぞ君と我との愛の歌。

日
没
後

アアサア・シモンズ

堆き蹴の雲になほ残る
 葡萄むらさき、赤らめるその褪め際の
 夕映の影を宿して、

静やかに和みたる海の面よ。

薄黄ばみ象牙色なす
空の上雲間にかかる蒼白き
利鎌の月と唯一つなる金の星
海のおもてをさしのぞく。

生か死か

アアサア・シモンズ

あはれ、そは死か、生か、蕭やかに、
争ひの鬨おさむる
さながらの音なひこそは、

緩やかに物うかる海の調。

森の樹々、その根を深く
穿ちぬる空洞に集ひ、つぶやける
初秋の蜜蜂のごと、
夢ごこち幽かなるその音なひよ。

あはれ、そは生か、死か、
あはれ、そは望か、はたや思ひ出か、
なべてのものを鎮め和する
とこととはの海の息さし。

海邊にて

アアサア・シモンズ

夜、ねすみの空とおぼろなる海、
折からを雨もしとしと降りそめて、
遠の涯際黒みつつ、たち罩むる
霧になづさふ帆の影よ。

上げ潮に、われは聞く、この磯回をば
繞り、とほ退き、絶ゆるかのその音なひを、
よよと泣き入り咽ぶらむ聲はさながら
廢れたる昔の歌のものうきしらべ。

今忍び足いつしかと夜はせまりて、
消えてゆく黒き帆のかげ、
海の線はつるあたりや、
永劫の渚の濱べ。

思ひも得ず、夢もおよばじ、
限りなき海と夜とは、
げにも鈍ぶげに甲斐もなきその極みなさ、
晝の間の望みをさへかき滅すよ。

蛇のアンダンテ

アアサア・シモンズ

節緩きアンダンテをぞ蛇が群夢に織り成す、
 鱗だつ黄と泥沼の黒とはた痘瘡の白斑、
 瞼なき青の眼に見まもるは無言に瞬へす
 反逆や、いとも鈍げに開きたるそのまなざしに

遠つ代の昔の祖の憤り尙も蠕り、
 くちなはの永く血をひき傳へたるその怨嫉は
 悪をしも盲目ぬるに、あはれ今交ぜ織にして
 織り込める東の邦の唐草の模様は目醒め、

解けつつ伸び縮まると見れば、また踏み躪られて
 しだかれし心の臓めき膨れたる頭搖かし、
 い照りたる日より光を吸はむすと高く擡げつ、
 さてあれば忍びやかに、徐に、色も褪せたる
 絨氈の装にたたまれゆくなべに、斑なる星と
 列ぶ環とえも判き難き曼陀羅の秘密を示し、
 かくて後膏ぎりたる、醜くかる息さしもなき
 生物は、また墜ちてゆく、鏡え淀む不動の姿に。

猫

シヤアル・ポオドレエル

なべて世の情かはらぬ女夫づれ、また哲人は、
 愛で癡れぬ額の上に年浪のうち寄するとき、
 和やかに肥えたる猫を、——それは家の寶ぞ、あはれ、
 主にも似て慵げに、忠だちて、また賢しかりな。

學問の、また法悦の友どちと員に備はり、
 しかすがに静けさ求め、くら闇の隈をあさりぬ、
 ただ獨惡魔のみこそ、高慢の誇手馴らし、
 「凶ごと」の乗物としも追ひ使へ、思ひの儘に。

瞑想に耽り蹲る三昧のすがたは、げにも、
 砂原に身を横へて涯もなき夢見ごころに
 甘寝する大スフィンクス、その様に面影通ふ、——

さればその兩の腰より熱き爐の炎噴きあげ、
 砂かといとも細かに燦めける金の火の子ぞ、
 幽妙に見ゆるその眼の瞳をば照らし出たる。

萬法交徹

シヤアル・ポオドレエル

「自然」てふ御堂には圓き生柱立ちも列並み、

その柱いともゆゆしき幽立の言の葉演べつ、
かくて人は、そそり誘ふ眼差に打目成へる
象徴の奥所知れざる森にしもさ迷ひぬるや。

滅えがてに打なづさへる山彦の裾しあひて、
微けくも一つの音に深々と交らふがごと、
夜に似て臘げに、日のごとも耀ひわたり、
諸の色は、匂ひは互にぞ呼びかはすなる。

多にある匂ひの中には、幼児のごとも淨らに、
葦笛の音かと華やぎ、牧の野と縁なるもあり、
更にまた高ぶり腐れ、豊かなる心あらぶる、

とりどりの匂ひは無限の物事に應へ通ひぬ、――

さながらに麝香、薰陸、沒薬とはた乳香の
己がじじ歌ふにも似たり、肉の、また靈の歡喜を。

海 風

ステファン・マラルメ

肉むらの悲しきかなや、書は皆読みも果たり。
飛べよ、ただ飛べよ、わが身は見も知らぬ、渡津海越えて、
青空の彼方に翔る海の鳥の性を羨む。
何かせむ思出の眼に映るへる池の鏡に
歡びのころを浸す物古りし寂びの園生も、
あはれ幾夜は、たや灯かげの侘しくも、白きぞよきと
もの書かぬ紙を照して目醒めたるわが燈火も、

はたや胸むねに幼せう兒にゆするわが妻つまも、今は何なにせむ。
 いざ行ゆかむ見みよ、大おほ船ふねは綱つなの具ぐと帆ほ桁げたととのへ、
 遙はるか々と浪なみ重かされる異い國くにさし碇いかり捲まき上あぐ、
 しかすがに酷くわき望のぞみに苛さいまれ疲つかれしおもひも、
 おさらばと打うち振ふる巾きんの手て招まねぎになほもなづこふ。
 さてもまた、この帆ほ柱しらの暴あらし風かぜをば誘まよはぬものか
 險けはしかる海うみに撓たはみて不ふ吉きちなる風かぜ吹ふき起おこり、
 やがて、船ふね船ふねのみならず、美うまし島しま、それそれも失うせなむか。
 さもあらめ、噫あゝわが心こころよ、汝なれは聞きく水みづ夫との船ふね歌うた。

懊 惱

ステファン・マラルメ

欠

欠

森の木立に

ポオル・エルレエヌ

603

森の木立に
かがよふ月白く、
枝ごとに
嘆かふ息ざしは
物かげよりぞ
「あはれ、わが愛づる君よ」と。
ふかぶかと
見えなす池の

水かがみに
映るおぼろの柳
こすゑに風は泣く、
いざや二人夢にや入らむ。

翳らにうちけぶり、
静けさのしととに
降りも来るや、
夜霧に流れて
虹の色なす月の光、
あはれこのあたら夜を。

涯なく暗き甘寝

ホオル・エルレエヌ

涯なく暗き甘寝は
掩ひぬわが命のうへを、
眠れよなべての望、
いの寝よ煩惱も。

今われ目も盲ひぬ、
善と悪との
おぼえも至く失せぬ、
あはれ夢の世や。

奥津城ごもりに
われはさながら、
ゆすらるる搖籃ぞ、
ひそに、ひそかに。

車中吟

ボオル・エルレエヌ

丘牧場後に退りぬ、
緑だち、露微だちつつ、
ほのかなる車燈のひかり
物の色を雑へ交して

谷あひにしじみ群だつ
樹々のこすゑ、黄金より、また
朱に移り變りゆく間を、
鳥の歌ほそぼそと聞ゆ。
秋は今、忍び足さへ
うちひそめ和みてあれば、
身は弛み、深くまどろむ、
ものうげの歌のしらべに。

月光

ボオル・エルレエヌ

君がこころはさながらに歌垣の庭、
 集ひ寄る假よそほひの組々は、
 笛の調に、舞の振り、さてもをかしき
 異やうのいでたちながら憂はしげ。
 諧す節さへ濃やかに歌ふは、あはれ、
 かなひぬる戀よ、ままなる世の命、
 樂しき折もさりげなき心にくさや、
 歌聲は月の光にまじはりぬ。

月の光は静やかに、悲しうるはし、
 枝に棲む鳥もいつしか夢ごこち、
 ほそぼそと立つ吹上は、よろこびあまり、
 神々の像をぬらして嘸り泣く。

おぼろの川に

ボオル・エルレエヌ

おぼろの川にうち霧らふ木立のかけの
 あを白み滅え失せぬれば、
 まことの枝の上にしもの寂びしげに、
 山鳩は泣きかなしみぬ。

あはれ旅人色褪せし風景を見る

汝が面も蒼さめたりな、

はた溺れたる汝が望み高きほつ枝に、

うらぶれて嘆きもぞする。

こころのうちに泣く涙

ポオル・エルレエヌ

こころのうちに泣く涙

町に降り来る雨のごと、

しのぶおもひのたゆげにも、

など泣きわぶるわがこころ。

ああ、やはらかき雨の音、

屋根にも、はたや小路にも、

あはれ、すすろにわづらひて

慍むこころに雨の歌。

なにゆゑとしもおもほえず、

あやめもわかず泣く涙、

誰がためにともあらなくに、

ただわけもなき憂き嘆き、

これにうはこす悲しみの

いづこにかある戀ゆゑに、

憎しみゆゑに、かくありと

612 知らでかなしむこのころ。

古き調

ボオル・エルレエヌ

眞玉手觸れしピアノはも臙に匂ひ、
夕影に薔薇色だちかがよへば、
鳥の羽音とほのかにも古き調は
節緩く、いともめでたく物憂げに、
移り香こめてただよへるこの一室をば
減えがてに、なほも忍びてたもとほる。
ああ何故ぞ、夢うつつ、物をや思ふ、

おもむろに揺られやすらふわがこころ、
何を求めてたゆとふや、その節まわし、
繰り返し、なづさひ諧す美し音は、
花壇のかたへいつとなく減えてゆきけり、
幽かにも、すこし開けたる小窓より。

秋の歌

ボオル・エルレエヌ

613 秋の井オロンの
揺り嘆く
咽びねの
染み入る身にしも

たゆげなる
わづらひや。

日は果てぬあはれ、
息づまり、

色も失せ、

そのかみを偲ぶ

おもひでに

泣かれぬる。

あぢきなき風の

吹くなべに、

散りまどひ、

ここに、かしこに、

ひるがへる

われは落葉。

シヤアルロア

ポオル・エルレエヌ

かぐるき草原に

コポルトゆきかへば、

風さへ音咽び、

吹くかのそのけはひ。

荒畑うちそよぐ、――

615
ここに何かある、

木立のこともなき
影にもところ怯づ。

人住む家もなく、
すさめる地のはだ、
かなたに熔鑛爐
燃ゆるや、あかあかと。

轟く停車場。

見つるは、そも何ぞ、
眼を遣りあやしみぬ、
いつぞぞ、シヤアルロア。

掘けしその臭ひ、

こはそも何事ぞ、
などしもはためきて
どよむか、この如く。

見よ、こは生地獄、
息吹く煙にぞ
人はも汗みどろ、
鳴りたつ金屬よ。

かぐろき草原に
コポルトゆきかへば、
風さへ音咽び、
吹くかのそのけはひ。

倦怠

ボオル・ゼルレエヌ

我はしも衰滅の期至りぬる王の國なり、
脊も高く髪美しき夷らの押寄する見て、
なほも金のすがたに編むは備げの物名の歌、
そが續く行のうちに日の光たゆげに躍る。

孤獨なるたましひはしも鬱憂に疲れわづらふ、
誰か言ふ血潮の色に戦ひの松明照らすと、
あはれ心弱くしあれば打いづる晴のいくさに
勇ましく振舞はむする——とても今これを最期の

その機や失ひぬべし。しかはあれ望ましきなし、
飲みも飽きぬうち笑ひつつバチラスは禱せしとや、
飲みも飽き食しも足ひぬ今にして何をか言はむ。

ただあるは炎の中に投げ棄つるおぞの癡れ歌、
ただあるは侮り顔に振けたる奴僕の一一人、
ただあるは天が下なることごとを厭ふところぞ。

詩法

ボオル・ゼルレエヌ

何事を措きても音楽

組み揃へたる均整を先は厭へよ、
 その翹きえぎえにして
 天がけるをば何ものも遮りなせそ。

さて選べ汝が言の葉を、
 俗になづさはでありもせむ語彙の中より、
 明暗のおもひこもりて
 うちまじらへる灰色の歌こそよけれ。

さればこそ晝の光も
 かげり匂へばその目見のいとどめでたく、
 さればこそ秋のみ空も
 雲にただよふ星影に酔のこちぞ。

しらべより外は何せむ、

ただ陰のみぞ色にあらず、光にあらず、

あはれ、しらべ、そは笛と角、

夢と夢とを愛で和し結び合さむ。

酷き機智、警句、淫けし

諧謔よりぞ汝が面をそむけてあれな、

青の眼の天も涙ぐむ、

この鄙しかる大蒜をかなぐり棄てよ。

あはれ、また能辯を捕へ、

首諦めてあれ、汝が歌のほがひする日に、

娼女を追ひやるぞよき、

しかせずばかの清興は空しからむす。

押韻の悪を誰が知る、
耳あかぬ稚兒とニグロもやたたきそめたる、
まことなる諧和に比せば、
ただ噪がしき鳴物の弄びもの。

ああ音楽、いつの世までも、
さらば汝が歌は羽ばたきて、清き瀆べに、
新しき日と戀をもとめて、
あこがれわたる魂に伴なひゆかむ。

汝が歌は暗示を尋めよ、
また花薔薇、麝香草の匂ひを吸ひて、
吹きゆする曉がたの

微風としも、——その外は徒なる文字。

秋の嘆き

ステファン・マラルメ

マリヤがわたくしを後に残して他界の星に行つてからこのかた——星といふのはどの星、オリオンか、アルテアか、さては汝、縁のゼナスか——わたくしはいつも孤獨の思に耽つてゐた。一日また一日と暮らして來た、この猫と唯ひとりで。わたくしが今ひとりでといつたのは物質上の相手がなかつたからで、この猫のときは神秘的な友、一の精靈である。それ故にながいあひだ猫と唯ひとりで暮らして來たと言つても好いだらう。そしてまた羅馬衰頹期の最後の一文人と唯ひとりで。と言ふのは、この白奴が神怪にも不可思議にも思はれぬやうになつてからは、「没落」の一語に綜べ得る一切をわたくしが愛したからである。それで一年のうちでわたくしが最も好む季節は秋だ

つ直ぐ前の、あの懶い夏の終りの日、一日のうちでわたくしがそぞろ歩きする時刻をいへば、落ちなむとして猶たゆたへる日輪が、微白の壁に黄銅の光、窓わくに熔銅の光を映すをりである。恰もそれとおなじくわたくしの魂が愉樂をおぼえる文學は羅馬の末期に息絶ゆる詩歌でなくてはならぬ。だがその文學は蠻族の回生的精神の些の浸染もなく、將また初期基督教徒の散文に見る稚げな拉典を吃らぬものであるべきは素より言ふを俟たないことである。

さて、わたくしはかかる愛誦の詩歌の一篇（その臘脂の彩は若人の鮮かな頬にも勝りてわたくしを迷はず）を讀んで、清淨な猫の柔毛に指を埋めたをりしも、窓の下からパアレル・オルガンの調が懶げに沈鬱に聞えて來た。白楊のながい並木路で奏でてゐるのだ。その白楊の葉は、野邊おくりの夜、マリヤが蠟燭の火影にまもられながらその路をたどつて行つたこのかた、わたくしには春の日でも陰氣らしく見える。さうだ、悲しめるものの樂器、それは本統だ。ピアノはぎらぎらする、井オロンは痛める神経に光明を齎らす。だがこのパアレル・オルガンは追憶のたそがれに切ない夢見ごこちをわたくしの胸に染み込ました。低い調子に合せてゐるのは田舎人のこころをよ

ろこばすやうな俗語の陽氣な一節、時代おくれの取りとめもない曲だ。それでありながら、そのルフランが魂の底まで響いて、ロマンチックなバラアドのやうにわたくしを泣かすのはどうしたものであらう。わたくしは緩やかにその曲を吸ひこんだ。そして折角のこの印象を亂して、その樂器がただ鳴つてゐるものでないことを感ずるのが、いかにも辛かつたので、わたくしは窓の外に錢を擲げてやるのを控へた。

冬のおもひ

ステファン・マラルメ

古びた索邇の時辰儀が神々と花との中でゆつたりと十三時を打つ。これはそもそも誰が家のかたみか、おもふにそのかみの驛邇の馬車を便に、はるばる索邇の國から送られたものであらう。

(あやしの影が色さびた窓わくのあたりにさゆらいでゐる。)

また君が威ニス^{エニス}の鏡、その影は、シメエラを刻んだ、箔もおかぬ飾り縁に包まれながら、泉の水のやうに深い。この鏡の面には誰がその姿を映したか。ああ、言ふまでもなく數^{かず}の手弱女がその水に美しの罪を洗つたのである。そして久しく見つむるままに素膚のまぼろしが浮びくるは定^{ちやう}である。

「悪性^{あくせい}のものよ、汝はよく悪性^{あくせい}のことわけを語る。」……

(われは見る、大窓の上なる蜘蛛のゐを。)

われらが衣装簞笥は極めて古いものである。見よ、今、火影が悲しげな木地の細工を赤く染めてゐる。疲れた窓掛も昔のもの、臂懸椅子の覆ひの布も色褪せてゐる。それに壁の上の古びた彫刻と、古びた調度のたぐひ。げにも歳月を経るままに、鸚哥、青鳥までも毛づやを失つたではないか。

欠

欠

人民が植物を甚く忌んで、樹といふ樹を引抜いて了つた。何うだらう、光明と鑽石、そしてその二つのものを映寫する流動物によつて造られた國、彼處そこならお前の氣にも入らう。』

わが靈は何の答もしない。

『ぢやお前は平和を愛し、動き行く物を観るのが好きだから、あの素敵な國土、和蘭に行つて棲む氣はないか。お前が幾度か繪畫を觀ては讚嘆したあの國に棲んで見たら、多分幸福であらうと思ふ。ロツテルダムは何うだらう。お前は帆柱の林、家の戸口に碇泊した船が好きではないか。』

わが靈は無言のまゝだ。

『ではまたバダビヤ、あすこはお前により深い興味を起させよう。さうだ、我々は彼處で熱帯美にまじはる歐羅巴の心を見出すこともあらう。』

一語なし、わが靈は死を欲するのさ。

『お前は自らの苦惱をのみ樂しむといふ、あの深い麻痺の状態に陥つたのか。それならば、死の姿に像つて造られた土地に、二人で行つて見よう。憐れなるわが靈よ、わ

たくしは二人の望に適ふその土地を好く知つてゐる。トルネオに旅する準備をしよう。もつと先まで行くなら行つても好い。バルチック海の一番涯まで。出来ることなら、人生からもつと遠ざからう。我々は極地に家を建てよう。其處では太陽が僅かに地球を覗くだけだ。光明と夜の緩やかな交替が變化といふものを見せず、虚無の半なる單調を齎らすのだ。我々は大暗黒の中に浴することが出来る。その間も絶えず極光が薔薇の花片を眼の前に撒きちらす、地獄の花火の反射そのまゝに。」

わが靈は急に口を開いて賢しくも叫び出した、

『何處かへ、世界の外の何處かへ——』

孰れか眞

ポオドレエル

わたくしは大地に虚空に理想を漲らすベネチクタを識つてゐた。人間はその眼さし

から、大なるもの、美なるもの、光榮あるもの、更にまた我々をして不滅なるものを信ぜしめるあらゆるものに對する希望を學び得た。

だが、この神怪な子は長く命を保つには餘りに美はしかつた。わたくしが彼女を識るやうになつてから日も経たぬうちに、彼女は死んでしまつた。春が墓場に香爐を振るその日、わたくしは手づから彼女を葬つた、印度人のするやうに香ばしく朽ちざる材の棺に納めて、わたくしは手づから彼女を葬つた。

それからわたくしがまだ大切なこの寶を埋めた場所をながめてゐた時に、忽ち亡き人によく肖た少女を認めた。その少女は、不思議なヒステリカルな烈しい態度で、盛りあげたばかりの土の上を躍つてゐた。笑ひながら鋭い聲で「御覽なさいよ、わたくしはその眞眞銘のベネチクタですわ！ わたくしは可成の働きものよ。貴郎は随分目無しで莫迦をしましたね、その罰にわたしをこのままで愛さなければならぬのですよ。」

けれども、わたくしは氣が引立つてゐたので、「否」と答へた。更にまたその拒絶を強めるために足で烈しく地を踏んだ、すると膝頭まで新墓の土の中に埋れてしまつた。

わたくしは現在、恐らくは永久かも知れない、係蹄にかかつた狼のやうに、理想の墓に囚はれたまま生き存へてゐる。

月のたまもの

ボオドレエル

氣まぐれな月が、搖籃に寐てゐるお前を窓から覗いて、ひそかに、「この兒は心からわたくしの氣に入つた」と言つた。

そして彼女は緩やかに雲の階段を踏み降りて、窓玻璃を透いて、そつと忍び入つた。してまた母たるものしとやかな慈愛から、お前をのぞき込んだ。と、お前の顔に彼女の炎が映る。お前の眼が緑に、お前の頬が甚く蒼白く見えたのは、全くその所爲だ。お前は眼をさまして彼女を見成つた、その時にお前の瞳が不思議なほど張りきつてゐた。彼女は兩の腕でお前の頸を柔らかく擁きしめた。それからといふもの、お前は

つもこの抱擁にあくかれて涙を流した。

彼女の歡喜の光の浪は部屋中に漲り渡つた、青燐のアトモスフェアのやうに、燦爛たる鳩毒のやうに。そしてこの生ある光明が物を思ひ、そしてかう言つた、——「わたくしは永遠にお前に接吻を與へる。お前はいつ迄もわたくしのやうに美しいだらう。お前はわたくしの愛するもの、わたくしを愛するものを愛するだらう。水と雲を、夜と寂寥を、廣大無邊な緑の海を、形もなく盛り上つた水を、行くに行かれぬ世界を、遇ふに遇はれぬ戀人を、不自然な草花を、人を酔はしむる香氣を、ビヤノの上にしだらなく疲れて、しやがれた好い聲で、女のやうに啜泣く小猫を。

「そしてお前はわたくしの戀人から慕はれ、わたくしに媚びる者から媚びられるだらう。お前は緑の眼を持つ人々の王妃となるだらう。わたくしが夜なかに寵愛して頸を卷いたことのある人々の王妃——その人々は矢張、海を、廣大無邊な緑の海を、形もなく盛り上つた水を、行かれぬ世界を、遇はれぬ女を、秘密な教儀の香爐のやうな盞の花を、そしてまた彼等の痴愚の表象とも見ゆる放恣で、快樂に耽ける動物を愛してゐる。」

ここだ、呪はれたる、わが愛する氣儘者よ、わたくしがお前の脚下にひさまづいて、お前の中に、あの畏ろしい女神、運命の名附親、この世なるすべての亂心者の盪惑的な保姆の姿を探り求めるのも、かうしたわけからである。

幻 覺

ボオドレエル

宴のやうな一室、浚んだ空氣が蔷薇色と青に軽く抹られてゐる眞に精神的な一室。魂は、その一室のうちで、悔恨と希望の薰香に蒸された夢幻に浸つてゐる。室内には一種薄明の感じと、青と蔷薇色に染められたさまざまの物の感じがある。——蝕の間の歎びの夢である。器具の姿がゆるく伸びて、ぼんやりと倦じてゐるが、これを見て、草木や金石の嗜眠的な特質が、すべての器物に賦與せられたもののやうに考へるものもあらう。

壁絨が玄妙な言葉で物を言ふ、花のやうに、天のやうに、沈みゆく星のやうに。

壁上には人工を盡した贅物は影もとどめない。その純潔な夢と、剖析し難き印象とを、かの有限の藝術、實質ある藝術に較べることは、寧ろ瀆聖の業である。ここにはすべてのものが音楽の飽和した鮮明と、快美なる朦朧とを保つてゐる。

選りぬいた名香の濃やかなにほひが、心地よく蒸した温もりに浮んで、この一室のうちに漾つてゐる。まるで花温室に入つたやうな感觸をおぼえて、睡たげな精神がうつらうつらとなる。

すると、豊かなモスリンの衣が、牕の前、臥榻の前に流れて、そして眞白な雪の瀑布が眼のあたりにひろげられた。臥榻の上にはわが夢の主宰、幻神女が横になつてゐる。神女は何故にここに來たのか、——誰が伴れて來たのか、——どんな魔力があれば、この快樂と宴の壇上に神女を据ゑたのか。何たる事ぞ——神女既にあり、そしてわたくしはその姿を認める。

薄明のうちに閃めくその眼眸の焰。それは微妙な恐ろしげな鏡とも言へよう、その鏡には人の心を照らす氣味悪さがこもつてゐる。誤つて仰ぎ見たが最期、人々は直に

その眼の力に牽かれ、壓せられ、食ひ入られて了ふのだ。わたくしはこれまで幾度か窮めて見た。好奇の心と讚嘆とを強ゆるこの二つの黒い星。

善魔の慈悲であらう、わたくしが今かうやつて、神秘、静寂、平和、薫香に圍繞せられてゐるのは？ ああ、この祝福！ われ等が生と名づくるものは、その最も幸福な状態にあらうとも、わたくしが今親しみ、一分毎に一秒毎に味ふこの至上の生とは全く懸け離れたものである。

だが、否！ 最早分時もない、秒時もない。「時」は減えてしまつて、わが世を統べるものは「永遠」だ。悦樂の「永遠」。

戸を叩くものがある。重々しく、物凄い音なひが響き渡る。そしてそれがわたくしには地獄の如き夢の最中で、鶴嘴の一撃をくはされたやうに思はれた。

かと思ふと幽霊が入つて来る。それは法律を楯にわたくしを苦しめに來た執達吏でもあり、わたくしの悲みに彌が上にも、身勝手な生活の瑣事を訴へ、不仕合を泣きに來た娼女でもあり、さもなければ原稿の殘部を催促に來た編輯者の小使であるかも知れぬ。

淨樂の一室、夢の主宰、幻神女、大ルネの言に隨へばシルフアイドー——すべてそれ等の魔力も、この幽霊の殘酷な音なひで滅びてしまつた。

畏怖——わたくしは知つてゐる、知つてゐる！ 全くだ、この狗小屋、この無窮の倦怠の棲所は眞實わたくしの棲所なのだ。ここに埃まみれになつて壊れかかつた感じのない器物もあれば、火の氣もなく焚付もない煖爐もある。悲しげな窓には雨の滴の埃を流した痕が着いてゐて、それに塗抹した未完の原稿と、凶會日に鉛筆で線を引いた曆がある！

そしてあれほどに鋭い官能で、この世ならぬ薫香のうちに、われとわが身を酔はしてゐたが、その薫香の代りには、氣がぬけた煙草の煙の匂と、何かよくは判らぬが、氣持の悪い、物の饜えるにほひが混つてゐる。人は今ここに頽敗の氣を吸引する。

この狭い世界に、この狭くて醜惡に充ちてゐる世界に、唯一つの懐かしい物がわたくしに微笑んで呉れる——魔酔劑の罨だ、調子はづれの無氣味な戀愛。だが、戀愛といへば孰れもおなじことだ、噫、寵もあれば詐もある。

然うだ、「時」が再び戻つて來た、「時」が今專制の王國を支配する。そして厭ふべき

「過去」と共に、そのすべての悪魔的追隨者たる「記憶」や、「悔恨」や、「戦慄」や、「恐怖」や、「悲哀」や、「夢魔」や、刺すが如き諸神経がたち戻つて來た。

敢て言ふ、秒を刻む音が強く森嚴に、今、發音する、そして懸鐘から滴り落ちる一々の聲が、「われは生なり、堪ゆべからず、和解すべからず」と、かう言つてゐる。

人間世界に、吉報を齎し來る使命を帯びた一秒時だにないことは判つてゐる、それは眼に言ふべからざる涙を催さしむるあの吉報を

然うだ、「時」が支配する。「時」が残酷な支配權をこれ迄とても振つて來た。そして「時」がわたくしを牡牛かなんぞのやうに、しかも二重の刺針で驅り立てる、——「ああ愚なる者よ、汝、奴僕、働き、且つ活きよ」と。

貧者の眼

ボオドレニル

噫！ わたくしは今日お前を憎む、何故だかその譯を聞いてもらいたいのだ。それをお前に説明するのも艱かしいが、お前がそれを理解することは一層艱かしいに違ひない。わたくしの考によると、お前は女の薄情を示すまたとない最も完全な手本なからだ。

二人は永の年月一緒に暮らして來た、わたくしに取つてはその年月が短いやうにも思はれた。二人が同じ思想を懐き、二つの靈が一つの靈に合するやう、相互に約束した、——つまるところ、何の新味もない夢だ、ただ萬人が夢み、一人も實現したことのない夢だ。

宵になるとお前は一寸慵いといふ風で、新道の角にある新店のカツフェのおもてに腰をおろす。その店にはまだ漆灰が散らかつてゐる。それだのに逸早くも未成の光彩を得意らしく見せびらかしてゐる。燈が點いた。そのまた瓦斯の鮮やかな氣勢かたといつたらない。恐ろしい力で白壁に眼も眩むばかりに照りつける。燦爛と輝く鏡の面、室内裝飾の縁かさや浮出模様の金色、繫いだ獵犬に引戻される頬の圓い唇従、手馴の鷹を腕に据ゑて笑つてゐる貴女、頭に果實とパイと獲物を載せたナンフや女神、腕

一杯にシラップの小瓶、染分の氷のオペリスクを抱へたヘエベヤガニメエド、——何の事はない、あらゆる歴史、あらゆる神話が此處にごツちやになつて、飽食家の天國を造り出す。

道の丁度向側には四十恰好の、疲れきつた顔つきをした、髻の灰色な男が立つてゐた。一方の手で小供の手を引き、一方の腕には疳弱ひよわで歩かせられない幼児を抱へてゐる。その男は子守の役を勤めてゐたのだ、夕方の運動に小供を連れて出たのだ。みんな穢い着物を纏つてゐる。三個の顔は非常に眞面目だ。六つの眼は、年齢相應に違つた心を見せてはゐるが、同じ讚嘆からこの新店のカツフェをまんじりともせず見つめてゐた。

父の眼は『素敵に綺麗なこつた。世界中の金きんが此處に集つて來たのぢやないかしら』と、斯う言つた。男の子の眼はまた、『何て綺麗なことだらう、だが自分たちのやうな人間はこんな處に入れやしない』と言つた。幼児の眼は飛び立つばかりの喜悦を口に出しては言ひ得ぬぐらゐ、その光景に眩惑されてゐたのだ。

歡樂は魂を雅みやびやかにし心を柔らぐと詩人は歌つた。その晩その歌はわたくしだけに取

つては正當だつた。この一家族の眼を讀んで感じたばかりでなく、實際渴を醫するに餘りに贅澤な盞を手に把るのも羞かしいと思つた。お前もきつとさう思つてゐるのぢやないかと、わたくしはお前を振向いて見た。お前の眼は實に美しい、お前の眼は妙に艶なところがある、多情の影を宿して、月姫の統しほしたまふ縁の眼、その眼の中をわたくしは深く見透した。その時お前はわたくしに向つてかう言つた。『あの人達たらいけすかない、乞食かきの眼でぢろ／＼見てますよ。あなた給仕頭にさう言つて追拂つてくだらない』

ここだ、おたがひに理解するといふことは艱かしい。愛しあつた仲でさへ、二人の思想は離れ離れであるのだ。

描かむと欲する希望

ボオドレエル

この希望を抱きながら心を苦しめるのは、人間としては不幸でもあらうが、藝術家としては幸福である。

わたくしは一人の女を描かむと欲して熱意を傾けた、その女はわたくしの眼には無類で、そして端睨すべからざるところがあつた。それは恰度旅人の夜の間に名残惜しくも見ずにしまふ美景のやうなものである。その女に遇つてからもう大分の月日が経つ。

美女である、そして美以上である。人を制する力が籠つてゐる。その女には黒の色が優つてゐるので、神秘で幽玄な點が人を牽きつける。双の眼には不可思議な色が夢見心地に動いて、その輝く、一瞥は燦爛たる一道の光、闇を劈く閃電である。

若しも人が光と幸とを放つ暗黒の星を想像し得るものならば、わたくしはその女を黒き日に比べても見よう。だがまたその女は人を直ちに夢幻境に誘ふ月である。そしてその眞實の月の力が女の身に干繋を及ぼしてゐるに違いない。月といつてもあの冷かな花妻に似てゐる牧歌の白々しい月ではなくて、暴風の夜に千断れて飛ぶ雲の絶間を、底深く懸つてゐる、嘲けるが如く、酔ふが如き凄婉な月である。純潔な人々の夢に通ふ慎ましやかな平和の月ではなくて、テツサリイの魔女の群が物凄き荒野 上を躍り狂はむが爲の咒咀によつて、天の宮居を失つた月である。

女の額には強い意志と犠牲を求むる愛の影が宿つてゐる。その鋭感な鼻が不可知と不可能の香をかいで、一體が不安な面ざしの中を、大きな口の微笑が言ふべからざる美しさを添へて輝く。白くて、紅で、熱えた口、その口を見れば、人は火山地方の山野に開く莊麗なる草花の魔力を想像する。

世間には慕へば得らるる望を男に起させる女がある。然しながらわたくしが描かむと欲するその女は力ある眼ざしの下に男をして徐々に死なんことを思はしむる性質の女である。

窓

ボオドレエル

明け放つた窓を窺く者は鎖した窓を窺く者にくらべて決して多くの事象を觀て取ることは出來ぬ。世の中に蠟燭の灯に照らされた窓くらゐ、深みがあつて、神秘めいて、豊かで、陰鬱で、或はまた燦爛たるものがまたとあらうとは思はれない。

我々が白日の下で見能ふかぎりのものは、窓玻璃のかけに行はるゝ事柄よりも常に興味のないものだ。あの暗い、または輝く穴の中に、人の世は活き、人の世は夢み、人の世は苦しむ。

屋根の大浪小浪のむかふに、わたくしは中年の婦を見る、皺が寄つて。貧しい、その婦はいつも何かに凭れてゐる、ついで外出をした例がない。その婦の額から、衣裝から、容子から、殆ど空なものから、わたくしはその婦の物語を編みだてる。そして

折々はその物語をわれとわが身に語つて聞せて、ひとりで涙を垂れる。

それが憐れな老爺であつたなら、わたくしは直ぐと彼にふさはしい物語を作り出すことが出來よう。

そしてわたくしは寢床に行く、萬人の中に生きもし、苦しみもしたことを誇として。君は多分言ふだらう、「それは眞實の物語か」と。それが何だ、自己以外の現實が何であれ、唯我身に活きる方便を與へて呉れるもの、我身の存在と存在の價值を感じさせるものならば、何でも好いではないか。

的中

ボオドレエル

馬車が森の中を通過する時、彼は馭者に射的場の方へ遣れと命じた、暇つぶしに二三發試めたいと思つたので。「時」といふ怪物を殺すことは人間の最も普通で正當な

る責務ではあるまいか。——さればこそ彼は崇むべくも、また憎むべき愛妻の手を華々しく握つたのである。この不思議な女は彼が爲にもるもろの樂の種子でもあれば、また苦の種子でもある。想ふにまたこの男の天才の大部分もこの女の資であらう。

數彈は標的を逸れた、その一發は空際遙かに飛び去つたので、夫の技倆の拙さを罵つて、無性に笑ひこける妻を顧みながら、「それではあの右寄りの、鼻づらを天に向けて高慢な様子をした人形をだ、よしか、可愛いエンゼル、それをお前だと假りに想つて見よう」と、男は言つた。

彼は兩眼を閉ぢて、引金を引いた。標的の人形は見事に首が落ちた。

そこで、彼は彼が爲めには缺くべからざる、そして無情なる美神、崇むべくも、また憎むべき愛妻の方へ向き直つて、前屈みになつて、その手を恭々しく接吻して、そして言ひ添へた、「可愛いエンゼル、己れの技倆は全くお前のお蔭だ。」

夢 想

ポオドレエル

廣い灰色の空の下、草も生えぬ茫漠たる埃の野原の上、そして其處には蕁麻や荆棘の類さへ見ることの出来ぬ、そんな野原を地面に屈んで歩いてゆく大勢の人々にわたくしは行遇つた。

その人たちは銘々恰度麥粉か石炭の袋、でなければ羅馬歩兵の武装のやうに重たい、素晴らしいシメエラを背負つてゐた。

だが其怪物は單に目方のかゝる重荷ではなくて、彌が上にも力強く逞しい筋肉で人々を掩ひかぶせ、壓しつけてゐたのだ。そして二の大きな鉤爪でその人々の胸のあたりを攫んでゐる。そのまた不思議な形をした怪物の頭が、その人の額の上に乗るかゝつてゐる工合といつたら、宛ら昔の戦士が敵を一倍恐怖させる目的で着冠つたおそろ

しげな兜のやうに見えた。

わたくしはその一人になぜ皆がさうやつて行くのかと訊いて見た。するとその人は、自分は何事も知らぬ、それは自分だけではなくて他の人たちも知らないのだ。けれども斯うやつて止めても止められぬ希望に驅られて歩いてゆく以上、何處かに向つて行くことは明らかだと、かう答へた。

奇妙なことには、その旅人の誰彼を問はず、頸にもたれ背を劈く残酷な畜生シメエラに就いては別段氣にとめてゐる様子もなかつた。これも我身の血を分けたものだと思つてゐると、誰かその中の一人が言つてゐた。その人たちの生真面目な、そして疲れた顔には失望の影といつたら少しも現はれてゐなかつた。陰鬱な空の穹窿の下、その空とおなじく荒れ果てた野原の埃の中をたどつて、永劫希望に咀はれた者の諦めた面色をして、彼等は前へ前へと進んで行つた。

そしてその行列はわたくしを通り越して、地平のあなた、この地球の圓い表面が好奇の人の眼からすべり落ちるあたりの雰圍氣の中へ消えて了つた。

その當座わたくしはこの深秘を窮めようと懸命に試みて見たが、直に不可抗の「無

關心」がわたくしを捕へて、そしてわたくしはその爲めに恰度あの人々が身を苛むシメエラに苦しめられるとおなじやうに重たい壓迫を感じた。

ぎやまん賣

ボオドレエル

世間には考へてばかりゐて實行といふことに反感をもつてゐる人々がある。えてさういふ人々が、不圖した場合に、不思議な説明すべからざる感動から、自分でも不能と思はれるくらゐ迅速に活動することがある。よく自分の家に何か新奇な不安が待つてゐはせぬかと危ぶみながら、戸を開けて入るのがたまらなく恐しくて、戸口をうるついてゐるとか、半月も手紙を開封せずにはとくとくとか、或はまた一年も前から必要に迫られてゐた旅行を、半歳も考へぬいた擧句やつと決意するとかいふ人たちなどが、いざとなると弓弦から矢が飛び出すやうな勢で實行に取かかることがある。

さういつたやうな氣不精で放縱な性なまのものに、そも／＼何處からそんな急劇な狂氣のやうな力が襲つて來るのか、また極めて簡單で必要な事件をすら處理することの出來ぬものが、時としては非常に大膽になつて、飛んでもないことや危険極まることを何うして實行するのかといふことは、萬事を知りぬいたと廣言する小説家も知らなければ、醫者も知らないのである。

最も無邪氣な夢想家であつたわたくしの友人の一人が、或時森に火をつけたことがある。彼が自白に據れば、普通世間で言ふ通りにそんなに容易たやすく森が燃えたつかといふ實驗を爲たのださうで、十度遣り損つて、十一度目にやつと成功したのである。

別な友人は、冗談に、期待の快樂を得んが爲めに、全く譯もなく、しやうことなしの氣儘から、運命といふものを見もし、知りもし、誘ひ出しもせんとする目的で、火の樽つぼの側で葉巻に火を點けた。この種の努力は畢竟倦怠と狂想とから生ずるのである。そして一般に、前にも言つた通り、極めて氣不精な夢想家によつて明らかに立證せられるのである。

もう一つかういふのがある。人前では眼を伏せて顔も擧げえぬはにかみ屋で、カ

フェに入るにも、芝居の切符賣場の前を通るにも、死ぬやうな思をしてゐた人がある。實際彼の眼には切符賣がミノス、イイカス、ラダマンサス諸神の威儀を具へてゐるやうに映するのである。それ程臆病な彼も、何うかすると街まちで出會つた老人の頸にすがりついて、びつくりした群衆の面前でその老人を熱心にかき抱くことがある。どうしてだらう？ その老人の容貌が不可抗力で彼を引きつけたが爲め——その爲めであらうか。さうかも知れない。併し彼自身でも一切夢中であつたと想像した方が正當である。

わたくしにも一度ならずさういふことがあつた。何だか心の中で絶叫の聲がする。かういふ時人は魔がさして來たなと感づくのであるが、それと共にやくもその犠牲になつて了つてゐる。そして悪魔は我々をして極めて異常な願望の無智な共犯者たらしめようとするのである。ある朝のこと、わたくしは起きには起きたが、氣分が變に重くて非常に悲しくて、倦み疲れてゐる中で、不圖、ある大事業、光彩ある活動がして見たくなつた。そしてそれから、わたくしはとうとう窓を明けた。

(斷つて置きたいのは、或る種の人々に起るこの神秘の精神は努力聯想の結果ではな

くて、寧ろ偶然の天啓とでも言ふべきもの、或は感情の緊張とも言へようか、さもな
くば醫師がヒステリイと呼ぶ心的状態、または醫師よりも稍深く考察する人々の悪魔
的と呼び做す性質のものであらう。すべて我々をして不可抗的に危険な放肆な行爲に
陥らしむる心的状態である。

わたくしが街の中で最初に認めたのは一人のぎやまん賣である。その調子はづれの
鋭い叫び聲が、巴里の重く鈍い空氣を透してわたくしの耳元まで上つて來た。これを
外にしては、彼に對して急劇に壓制的な憎惡の念を催す譯とは、別段これといつて
なかつたのである。

「おい、其處だ。」とわたくしは大聲で言つて、わたくしの部屋まで來るようになにに命
じた。わたくしは彼がやつて來る間、心中私かに興がつてゐたといふのは、わたくし
の部屋は六階目であり、階段は狭いと來てゐるから、登るに困難であらうし、あつち
の隅こつちの隅に荷をぶつつけて、やにつこい商品に疵をつけるだらうと想像したか
らである。

彼はとうとう遣つて來た。わたくしはいろ／＼と蓋をいぢくり散らした擧句、「何、

色の附いた蓋は持ち合せがありません？ 薔薇色や赤や青の蓋、魔法の蓋、極樂の
蓋？ お前は慮外な奴だ。人生の美を思はせるやうな蓋の一つも持たないで、この貧
乏町を振れ歩いて行くなんて厚かましいぢやないか。」わたくしはかう言つてやつて、
手荒く彼を衝きのけた。すると彼はよろ／＼しながら階段を下りて行つた。

わたくしはそれからバルコンに出て行つて、小さな花瓶を手に取つて、ぎやまん賣
が下の出口に現はれるところを見計つて、上から垂直に件の武器を彼の荷の端に落し
てやつた。すると荷は激動を受けてひっくり返り、彼の振れ賣りの身上はすつかり粉
微塵になつて了つた。その音といつたら恰も電火に打たれた水晶殿が碎け散るやうな
響である。この馬鹿げたことに狂氣になつて、わたくしは彼の背に「人生の美、人生
の美」といふ言葉を激しく浴せかけてやつた。

かかる神経質的な愉樂は危険を伴ふものである。それが爲めに人はしば／＼高價を
拂はなければならぬ。けれども一瞬の間に悅樂の永遠を求め人に取りつて、責罰の
永遠が抑も何であらう？

有明詩集自註

この詩集には長短併せて二百四十九篇を収めた。その中に五十篇の譯詩が含まつてゐる。これがわたくしの詩作に於ける二十餘年間の生涯の收穫である。即ちわたくしに取つては、善からうと惡からうと、如何ともなすべからざるものである。それであるから、これはまたわたくしの心血そのものである。

本集の順序は新しきものを前にした。

「自畫像」は本集を編むに當つて始めて蒐集した。一度雑誌に出したなりで、これまで書物として刊行する機会を得なかつたものである。「有明集」刊行後、即ち明治四十一年より大正四年五月に至る凡八年間の作を収めておいた。

「豹の血しほ」は舊の「有明集」の改題である。題名が本集と混同する虞があつたから止むなく改めたのである。

「有明集」及びその以前の集の刊行年月を左に記しておく。

「有明集」——明治四十一年一月。

「春鳥集」——同三十八年十月。

「獨絃哀歌」——同三十六年五月。

「草わかば」——同三十五年一月。

舊集はそのまま本集に採用してはない。新たに多少類別するところがあつて、それぞれに標目を掲げた。随つて目次の順序も變つてゐる。内容に至つては殆ど全篇に亘つて改削を施した。その當時あまりに表現に急であつたが爲め、晦澁、混雜、矛盾等の缺陷を生じ、詩として自然の調律を失はむとし、また既に失へるところがあつた。わたくしは主としてその缺陷を補つておいた。それが爲にわたくしは全力を竭して昨年夏以來半歳の時日を費した。一句一行ことごとく仔細に點檢せぬものはない。宛も慈母が病兒に對する愛念を以てこれに従事した。併しながらこれには限度がある。表面の疾患を除いても、病兒は矢張根本的に病兒であつたかも知れない。それ故にわたくしは病兒は病兒だけの泣聲を自然の調律に上すことを欲したので、今日の思想を以て一分をも加ふことは決してあるべからざることとなしたのである。わたくしは自然の約束に就て深く經驗するところがあつた。愛念が強ければ強いほど、自然の約束は嚴しいのである。

續譯は「獨絃哀歌」以後の集には三四篇づつ載せておいたが、それ等は今度大半改譯した。それに「有明集」以後の分を加へ、更に本集目次中ポオドレエルの「猫」よりランボオの「眠」に至る

までの六篇と、エルレエヌの「おぼろの川に」より「詩法」までの七篇とを、新たに譯して添へておいた。

初め續譯を載せるに就て、わたくしの如き無學のものには全く埒もない業くれであるとも思はぬでもなかつたが、粗漏は粗漏のままに、わたくしの創作の一部を成すものとして矢張集めておくこととした。愛誦した各篇も原文のまままで差措く時は單に外國語としての價值より外には何物もない。併しそれを愛誦したところに、その詩は國語的に創作せられねばならぬ衝動をわたくしに與ふるものである。それ故に續譯は善惡ともに創作であらうと思ふ。

自畫像

前にも述べた如く、ここに集めた諸作は「有明集」刊行直後より大正四年三月「マンガラ」發行を経て、その五月に至るまで、凡八年間に亘つてゐる。その期間は新詩壇に於て少からぬ動搖を生じ、一面詩論の盛んであつた時代である。新主張の旗幟は詩歌の解放といふことであつた。恰もこの時「有明集」が出た。自然「有明集」は新主張に對する性上げられた觀を呈した。今思ふと「有明集」は不思議にも時代の思想の轉機の上に立たされたものである。わたくしはそれを悔むものでは決してない。わたくしは今日その打撃の恩を寧ろ感謝せねばならぬと思つてゐるのであるが、そ

の當時わたくしは生死の大患に罹り、その後五六年に亘つて、肉體の衰弱と共に精神上には自暴自棄の苦惱を経験したのである。兎にも角にも詩歌解放運動は次第に勢を増した。それは最初相馬御風氏の議論や川路柳虹氏の創作に依つて端を發したので、殊に川路氏の口語詩は河井醉茗氏が出てゐられた「詩人」誌上で發表されたのであるが、強烈な外光の下で種々雑多な色と音とを交錯反映する港の印象的の描寫などを見て、わたくしは確かに新藝術が生れたと思つた。調律の拘束のある（日本語に於て果して拘束といはるべきほどのものがあらうか。）詩歌に對して、その缺點を（缺點は寧ろ詩人の方にあるのであらう。）補足するものだと思つた。併しその當時も今日も、自由詩の第一の強味は口語を用ゐるといふ點にあるのであらう。さうした影響はわたくしにも漸く現はれて來た。今ここに「自畫像」の標題の下に集めた八年間の所作はわたくしの肉體の衰弱と心の動搖と懊惱とを示すもののみである。

「出現」——この中「出現の歌」を除いて、他は大正三年の作である。

「光明涌出」——本詩集中最も新しき創作であつて、「あれ野」一篇を除き「出現の歌」を加へた七篇は大正四年三月に刊行した「マンダラ」第一輯に載せたものである。「マンダラ」は河井醉茗、澤村胡夷兩氏の主唱で、わたくしが表面責任者の地位に立たせられてゐたものであつたが、第一輯だけ發行して後は續かなかつた。これは明治三十九年に野口米次郎氏が主幹で「アヤメ會」を組織し、

英米の新詩人をも聯ねて「アヤメ草」トヨハタゲモ」を刊行した計畫と大略同様の動機から成り立つたものである。わたくしはその「マンダラ」第一輯に序文を書いた。「光明涌出」とても概括していふべきものであらう。それはここに掲げた詩の注脚の如きものであつた。わたくしは更に精神的孤獨の中に苦しまざるを得なかつた。

「あれ野」は同年五月の作である。

「感覺の整調」——「見えぬ花の匂ひ」、「鸚鵡」、「途上」、「破滅」、「食卓」は明治四十一、二年の作、「夜曲」は同四十四年、其他は大正一、二年に亘つた作である。

「狂想」には今度「都會的印象」の副題を附して、多少内容の表現の意義を限定し和らげておいた。併しそれを單に外面的に解釋するやうの方便として見られては困るのである。

「雪景」、「或る蒸熱き日の感覺的效果」、「冬の出園情調」、「麻痺と誘惑」、「冷血と倦怠」は東京市の西郊に居住してゐたをりの紀念ともなすべき作である。

わたくしの信ずるところに述べれば、詩は直接の事惑（内外共に云ふ。）の刺戟を介して惠まらるる暗示、即ち感覺の綜合整調そのものの開展である。換言すれば自然の生命の感覺的表現である。感覺的といつてもそれが直接の刺戟そのものに限らるる以上矢張外面的のものとならう。兎に角人間の心理状態は複雑である。聯想は錯綜する、記憶も雑多である、享樂、苦惱、悔恨、昂奮、衰頹、誘

惑、耽溺等の無始の煩惱の積集薰染がある。併しながらこれ等の経験もそれが個人的である限りに於て外面的であるが、一度或る衝動を受くることに依つて測らすも暗示世界の空氣に浸染する時、前に個人的、主觀的に過ぎなかつた諸経験もここに始めて律動的に換起開展せられて客觀化されるのである。わたくしはかかる状態を感覺の綜合整調といふのである。これが藝術上暗示の内容である。或はこれを心理的に自然の生命の内容の表現といつても好いが、わたくしはそれが爲めに、信の純一性の中に藝術を没入させることに於て、藝術を極端に單純化することは何うであらうと思ふ。自然の一念に換起開展される一團の經驗内容はそれみづからに於て或る纏つた律動を選択するものであらうから、これは矢張相應の量をもつた一篇の中に纏めらるべきものであらうと思ふ。ここに藝術の内部單純化に於ける複雑性が肯定されるべきものであらうと思ふ。

「或る蒸熱き日の感覺的效果」に於ける一煙突はわたくしに取つて忘れることの出来ぬさまざまな印象を残した。わたくしはその煙突が麥畑の傾斜面の上に直立して赤く落日に照らされた光景の美に就てつくづくと考へたことがある。または老母や親しきものの死をそこに弔つて、幾度となく痛切なる感情を抱いたこともある。併しながら單に視覚から起る美感はこれをそのまま詩に翻譯するは困難であるといふよりも、寧ろ不可能であり、それに依つて繪畫と詩歌とが補足的關係にあることも善く判つたが、それかといつて痛切なる感情のみでもわたくしの如き煩惱の深きものには、そ

れが必しも表現を詩に與ふる動機とはならず、却てただわけもなく何事もなきやうなる蒸熱き日に於て、不思議にも暗示がめぐまれたのである。そして直ちに感覺の綜合世界の開展に隨つて一念のエフェクトを得た。それがこの詩である。

「羈旅小景」——「待宵草」と「吳須のほひ」は共に明治四十一年四月より五月にかけて九州に旅したをりの作で、その歸途宮島に立寄つた。「赤き破滅」は明治四十二年二月藤村、花袋、夢想庵諸氏と共に天城越えをした時の印象の一つ。「印象」は明治四十一年八月再び甲州を通過して甲府盆地の展望の美觀に魅せられ、その紀念にもと書きとどめておいたもの。「旅」は明治四十年七月木曾旅中の情景。詩中「終りの宿」とあるに奈良井の古驛のことなどが思ひ浮べられる。

「病熱と錯覺」——四篇とも明治四十一年の作。前年の秋にわたくしはひどく扁桃腺を腫らしたことがあつた。ここに歌つてあるのは皆その時のことである。扁桃腺は一週日の後には癒えた。わたくしはその後「有明集」を出す準備に取りかかつたが、十二月中旬に至り、「有明集」の校正半ばにしてまた病に臥した。今度は大患であつて、翌年の三月まで床に就いてゐた。こんなに長くわづらつたのは、少年時に脚氣にかかり生死の境にさまよつたことがあつたが、今度で二度である。はじめは矢張脚氣とばかり思つて半月ぐらゐそのままに放擲しておいたのが、ひどく祟つて來たのである。病氣は急性腎臓炎であつた。三月下旬に漸く床上げをして、それから四月下旬に前に述べたと

ほり九州に旅行し、五月のすゑに宮島京都に立寄つて歸宅した。この旅行は大患後としては少く無理であつた。さういふところに近因があつたものか、わたくしは間もなく頑固な神経衰弱症に冒されるやうになつた。「感覺の整調」中の「破滅」「食卓」等は勿論象徴主義の綜合情調に依つたものではあるが、實際上の衰頹的壓迫觀念が、その刺戟となつたものである。

「哀愁のしらべ」——すべて明治四十一、二年の作である。「雨もよひ」は赤羽橋附近の情景から暗示された。「古きかなしみ」の露盤の錆には丸山の塔が想ひ起される。

「初心鈔」——明治四十四年の作。多少小歌などの調を加味して試みたものであるが、その材料としては、その前年の春もまだ浅いころ、花袋、空穂、孤雁、木城の諸氏と共に、奈良、京都を歴遊したことがあり、その時の印象が最も適してゐたので、それを用ゐてみた。其他は追々に作り足したのである。「北國」は信州澁温泉に行く途中、夜間瀬川を渡つて一茶で知られた湯田中に入るのであるが、その川の堤に柳の老樹が多かつた、それが旅の哀愁をそそつた、ただそれだけのことが忘れかねての作である。

「よもぎのほひ」は昨年十二月弘田龍太郎氏の手によつて作曲された。

豹の血しほ(有明集)

「茉莉花」——もと「豹の血」と題しておいたのであるが、それを今度集の名に譲つたがため改めたのである。

「朱のまだら」——「朱のまだら」の中に書いてあるアカシヤといふ植物を全く誰も注意しないが中々好い風情のあるものである。明治何年ごろのことか、ゴムの木と間違つて、はじめて東京に輸入されてから、よく見附内などにごたごたと植ゑてあつた。それが何時の間にか引抜かれてしまつた。帝劇の前の堀端などにはまだ少し残つてゐるかも知れぬ。

「淨妙華」は少しく調子がちがつて能辯に過ぎるやうではあるが、この詩は直ちに昨年歿した中澤臨川氏を追想せしめる。その當時、この若い工學士はわたくしを何かの序に丸の内の變壓所(?)に案内した。その頃はあの邊一面に荒野の如き有様であつた。そのたゞ中に赤煉瓦の建物があつた。多分帝劇の後方、東京日々新聞社の近傍であつたらうと思ふ。ブンブンと音して廻轉する電動機やら壁上にうねる導線に就て説明を聞いたことがあつた。このをりの感銘に基づいて歌つたものである。

「夏の歌」——わたくしはかういふやうに蜥蜴が雑草の根を走りつつ乾いた土をこぼす土手の下で生れたのである。中庭の小さな池の縁には形ばかりの石組があつてクチナシの花が毎年咲いた。そこにあつた麴町の家に、わたくしは生れ落ちてから三十年間住んでゐたのである。悲しかつた幼年

時も、愛慾に燃えた青年時も。

「信樂」——これは明治三十八年十二月に老父を失つた後に書いたものである。わたくしは少年時代に一度宗教に對する熱意をおぼえたことがある。人に見られるのを厭つて、懐の中で合掌しながら途を歩いた。今思へば不思議の心狀であつた。そしてこの詩を雑誌に出した當時、僧籍にある一青年がわざわざわたくしを尋ねて來られた。その青年からわたくしは梵網菩薩戒經を贈られた。讀誦に便した小形の折本である。その後その青年には一度も遇ふ機會がなかつたが、心づくしの經本は常に手近の書架に挟んである。

「おもひで」——野口米次郎氏の依頼で作つたものである。この一篇は十時潔氏の手につけて作曲され、音樂學校の演奏會で歌はれた。二三年前のことであつたが、わたくしに取つては全く思ひもかけぬことであつた。

「鐘は鳴り出づ」——明治六年十二月に三縁山増上寺が炎上した。その頃は教界に波瀾が捲き起つてゐた時代である。わたくしは老父から増上寺が焼け落ちる光景を度々聞かされて、耳に熟してゐた。それがこの詩の素材となつたのである。

「不安」

「孤獨」——これは前にも述べたことのあるわたくしの生れた廻町の家の隣地に棕桐が五六本高々

と生ひたつてゐた。夕榮の雲の色と金星の光とは、わたくしの記憶の圖の中では、いつもその棕桐を前景として見たされる。幼年のをりの印象は何といつても強いものである。そしてまた佗びしくも寂びしいものである。

「大鋸」——深川の木場で感得した幻覺である。あすこには水と材木と肉むらのにほひの交響樂がある。

春鳥集

「花のをぶえ」

「公孫樹」——公孫樹はわたくしの愛好する樹木の一つである。

「朝なり」——江戸橋から荒布橋、あの邊を綜合した情調に依つた。

「誰かは心伏せざる」——明治三十七、八年戦役に於ける紀念となつた作である。壹岐殿坂から下つて來ると、正面に機械の響と蒸氣と黒煙と火光とでいきり立つた砲兵工廠が見える。そのをりの名狀すべからざる感情はこの詩の題名の如くであつた。當時戦争を題材としたものが他に兩三篇あつたが、今は手許に「コサツク」一篇だけが残つてゐる。

ひんがしに
そそぐアムウルは
新妻の
よきや君、コサク。

あら牧の
ステブ野のうまれ、
槍の穂の
實りいかに、コサク。

百年の
うまき酒、けふし
君が飲む
うたげなり、コサク。

たたかひは、
これぞ紅玉の
さかづきと
見じや君、コサク。

たたかひは
末路か、死か、さあれ
いなまじな、
ツアルの臣、コサク。

「渴望」

「技藝のうたげ」——もとの集では「琴天會に寄す」といふ題になつてゐる。明治三十六年十月の作である。琴天會といふのは洋畫家の會合であり、琴平と天神の縁日を會日と定めるといふところから名づけたので、かういふやうに一風變つたところなども、この會合の牛耳をとつてをられた岩村透氏の風流のすさびであつた。岩村氏は既に故人となつた。あの快瀾で親しみのある皮肉な談話

の調子は最早聞くことが出来なくなつた。わたくしは岩村氏とはその會合の催された前に三宅克巳氏から紹介されてゐたのである。それはロセチ研究の書物の借覽を三宅氏を通じて申入れたのがそもその縁で、岩村氏の孝洗坂下の邸を數週間うちつづけて、辨當持參で通ひつめたことがあつた。明治三十五年の師走のことであつたかとも思ふが、わたくしは毎日氏の書齋でロセチに浮身を鑿してゐたのである。わたくしは第一に氏の藏書の豊富なことに一驚を喫した。ロセチ關係の書物だけでも手近に二十冊ぐらゐはあつたらう。そして岩村氏は藏書家の物堅さから書物は一切門外不出であつた。わたくしが岩村氏の書齋に通ひつめたのはそれが爲めであつた。

「海の幸」——故友青木繁氏の未完成の畫である。この畫は明治三十七年白馬會展覽會に出品された。鉛を手にし大鯨を肩にして濱邊を進みゆく十人の裸體から組立てられた裝飾風の畫面である。青い海の水平線が裸體の人物の脚の間から低く見える。背地はすべて金で塗りつぶす計畫であつた。

「天平の面影」——藤島武二氏の畫幀である。もと「獨絃哀歌」中に收めた一篇であるが、畫に寄する作としてここに纏めてたのである。この畫も裝飾風で、天平時代の風俗をした若い女が箆篋を擁いて立てゐる。背後には紫の花をつけた一本の桐の木がある。これは多分明治三十六年の白馬會展覽會に出品されたことと思ふ。

「日のおちぼ」

「夏まつり」——山王祭である。東京市の文化的設備が漸く進んで来て、山の手の町にも、電車の軌條が敷けるといふことに決つたので、山王祭としてはこれを名残りといふ氏子の意氣組であつた。明治三十六年六月のことである。實際それは夏祭の氣分をそそる最後の賑ひであつた。

「傳奇的構想」——これはむしろ「傳説の心理的構想」といふべきであつたらう。併し標題としては長きに過ぎるので止めた。「人魚の海」、「さび斧」の二篇はもと「有明集」にかかげたものであるが、今ここに一纏めにしておくことを便とした。これ等の諸篇でわたくしの狙つたところは、傳説の美辭的再現ではなく、その心理的開展である。ロセチのパラッドの優れた點は全くそこにあつた。さういふわけから、ロセチに私淑してゐたわたくしが、その影響を蒙つたのは免かるべからざることであつた。それにも拘らず、わたくしは國語の試練の上で多少の誇を持つてゐる。それは國語の使用上代名詞の不自由なること、隨つて會話の呼吸をややもすれば障ふること——それ等の缺點を律動に活かしてゆくといふことは思つたより困難なものである。これが叙事詩風のものならばさまでのこともなからうが、端的の心理的分析を短い詩句の重疊の上に試みるのは決して容易ではない。併しかういふ風の詩を作る人は最早あるまいし、また傳説の心理的構想は歌劇風のものとして専ら表現さるべきものであらう。

「姫が曲」——この曲は英國の宣教師で、ギルといふ人の書いた「南太平洋諸島の神話及歌謡」中

の「泉の精」と題した一章の傳説を素材としたものである。巖谷小波氏が「世界お伽話」の材料を集められた中にこの書があつた。それをわたくしがまた借覽したのである。然るにかの小泉八雲氏は早くも例の美文でこの一章を書直して、世界の奇譚を丹念に物語る書物の中に收めてある。そのことをわたくしは後になつて知つて、不思議な暗合に驚いた。その傳説といふのはかうである。はじめ月夜に遊ぶ水精の女を、そのところの酋長が人をして捕へしめ、これを寵愛した。女が懷孕した時に、女は「この腹を剖きて胎兒を出し、わが亡骸は土に埋めて呉れ」といつて嘆き悲しんだが、女は既にして一兒を産み落した。女はまた云く、「人界に来て子を産めば、水底の國の母は悉く死ぬであらう」と。その後酋長は女の手を執りて共に泉の底に下りゆかんとしたが、人間の悲しき約束として水底にたどりつくことは出来なかつた。酋長は遂に女に別れたといふのがその荒筋である。

「さび斧」——一曲の大筋は何等の傳説に據つたといふのではないが、鏡の説話とか樹木を咀ふ習俗とかはすべて劇的象徴として取扱つたものである。その他眞珠や橋の實などもおなじである。

「人魚の海」——西鶴の「武道傳來記」の中の一章に據つたものである。人魚の海と熟した言葉も西鶴の造句そのままを用ゐたが、人魚の出現するをりの形容などもまた一々西鶴の言葉に據つた。

獨絃哀歌

「煩惱」——新詩壇で小曲(十四行詩)をはじめて試みたのは薄田泣菫氏であつたらう。その作は「暮笛集」に載せてある。わたくしはまた別の詩格を用ゐてみた。四七六を一行とする調律は讚美歌の中から拾ひあげて來たものである。勿論讚美歌では他の調律と雜へてあつたものを、今ここに獨立させてみたのである。

「紫蘇の葉」

「そのねがひ」、「わがこころ」、「わかきいのち」の諸篇はもと「草わかば」に收めてあつた作から斷章して改題を施したものである。「自然」はそれと同時に思ひ浮べたもので、これは新作であるが、しばらくここに纏めておく。

「佐太大神」——「出雲風土記」に據つたものであるが、これを太陽神話としてみても、異色のある傳であらう。

「新鶯曲」——これもまた「出雲風土記」の法吉郷の條下に於ける簡單なる記事に據つたものである。その文には「神魂命の御子、宇武賀比比賣命、法吉の鳥と化りて飛び度り、此處に靜まり坐ます、故に法吉と云ふ」とあるだけである。スキンパアの「イチャラス」などを耽讀してゐたをりの

作である

草わかば

「黎明」

「日神頌歌」——この詩などが最も早い作であらう。明治三十二、三年のころの讀賣新聞の新年附録に、紅葉山人の手を経て出したやうにおぼえてゐる。わたくしがそもそも文壇に乗り出すことの出来るやうになつたのは、すべて尾崎氏の庇護があつたからである。そのころわたくしは古典をしきりに讀んでゐた。羽穂雄神が文布織りますといふのも「古語拾遺」から探つて用ひたのである。

「可憐小汀」——明治二十八年の春、バイロンの「チャイルド・ハロルドの歴遊詩」を懐にしながら、はじめて旅に出て、九州に行つたをり、瀬戸内海を尾道から船で渡つた。詩想の暗示はその時得たものである。わたくしに取つては最も紀念すべき作であるが、これが現在のやうな形を取つたのは明治三十三年ごろのことであつたらう。その日の鷗のみちびきはわたくしをして遂に詩人たらしめた。そして現世に於て甚だ苦しみ悩むものたらしめた。わたくしはこの流浪の鳥に對して追想する懐しさを持つてゐると共に、多少の怨恨を抱かすには居られぬのもまたその爲めである。

「かすかに胸に」——ここに後年の「さび斧」の萌芽がある。わたくしは今度詩集を整理するに當

つて始めて氣が附いた。

「新譜」

「菱の實採るは誰が子ぞや」——九州の情景を歌つたもの。採菱は佐賀の郊外などでは年中行事の一つともなるべきものである。

散文詩と翻譯

「暗示の森」——この作で「魂の法會」と「世相」が最も早きころの作で、それは多分明治三十八年であつたらう。「狐の剃刀」は同四十三年、「驟雨」と「脚痕」とは同四十四年、その他の三篇は大正二年の作にかかる。

「常世鈔」

「述懐」——ランドルが七十五歳生誕日の翌日一人の女友に贈つたものだといふことである。

「明星」——キイツの詩中でわたくしの最も愛誦するもの。

「宿縁」——ロセチの傑作の一つであらう。原題は「閃光」とでも直譯すべきであらうが、感覺の綜合的暗示が倏忽として起り、その瞬間に宿縁を認めるといふのである。これは神秘的としてよく評さるのであるが、ロセチの作詩の態度から推しても、これは寧ろ心理的といふべきであらう。

後の象徴詩に通すべき作である。

「愛のまなざし」、「希望」、「静畫」はロセチが有名な小曲集「生命の家」から抜いたもの、その中「静畫」は鳥崎藤村氏の囑に依つて譯出した。同氏の小説「春」に載せられてあるものがそれである。

「エニスの牧歌」といふのはジョルジオネの畫で、ルウヴル館の藏といふことである。

「聖燈」と「宿驛にて」とはロセチが青年のをり、ホルマン・ハントと共に、巴里から白耳義に旅行した時の逸詩である。わたくしはこの「宿驛にて」の詩が好きである。ヱルレエヌの矢張白耳義にゆく途中の作である「車中吟」と何處か似通つた空氣と夢とがある。

「蛇のアンダンテ」——シモンズの詩中でも珍らしい情調と律動を持った作である。はじめ散文詩風に譯出したが、甚だ飽き足らぬ節があつたので、現在の詩形に改めた。

「猫」——象徴派に附物の生物がここに現はれて來た。ポオドレエルがこの懶き驕慢の動物を詩律に手馴した技倆は實に素晴らしいものである。これは物凄い三昧の中に感覺的聯想を夢みるポオドレエルの自畫像でなくして果して何であらう。この動物はマラルメの「秋の嘆き」では一の精靈と呼ばれ、ヱルレエヌでは「女と猫」と題する傑作となり、かのヒュイスマンスが制作のをりにはその肩の上にもこの動物が蹲まつてゐた。そしてまたポオドレエルの散文詩「月のたまもの」中で

欠

欠

おもひて
しのばゆ。

吹きまどふ
あらしに、

わが身は
かしこ、ここ、

散りゆく

おち葉や。

わたくしはこの第二譯の方が寧ろひきしまつてゐて好いかと思つてゐる。

「シヤアルロア」——ヱルレエヌが自分で殊に愛誦した詩であるといふことである。詩中「コボルド」といふのは鑛山の精。

「倦怠」——詩中「パチラス」とあるのは多分暴君ポリクラテスに愛されたサモスの美少年のことであらう。この美少年はまたアナクレオンにも愛されたといふことである。

「詩法」——これはヱルレエヌの詩歌の表現の原理とも精要ともいふべきものである。第一に音楽だといふ自信がここに示され高調されてある。この音楽といふ意を一層適確に現はしたのが「ニュアンス」といふ言葉である。それはやがて「しらべ」であり、「おもむき」であり、「にほひ」であり、「かげ」であり、また我邦の定家の歌學からいへば「幽玄」ともいふべきものであらう。これは即ち言語の流動、交錯、反映、照應から生ずる微かな色合ひである。詩法の妙はその「ニュアンス」に徹することである。即ち言語の解放であり、言語みづからの性能を自由に盡さしむることである。それ故に言語の虚使をひどく嫌つた、——能辨を捕へてその首を締めよと叫ぶのはそれが爲めである。眞實の表現の前には言語の外面的技巧は俗悪で空虚なるものであつた。ヱルレエヌは一八九六年（明治二九年）の一月八日に歿したが、その歳の三月に、この詩は故上田博士に依つてわが文壇に紹介された。「サンボリスト」といふ名稱も同時に始めて傳へられた。この詩の第四節には博士の譯が添へてあつた。「何となれば吾等の望むところは影にして色に非ざればなり、あはれ影のみぞ夢を夢に結び、笛と角とを調ふべき」とあるのがそれである。この詩はわが新詩壇にヱルレエヌを紹介した最初の縁を繋いだものであつたといふことを、我々は記憶しておきたいのである。

「序歌」——巻頭にかかげておいた本集の序歌は、はじめからそのつもりで書いたものではない。ただ本集の整理に従事してゐる中に思ひ浮んだ五篇の短章をここにまとめておいたといふまでである。随つて一々の短章の間に表面上何等の連絡があるのではない。併し殆どおなじころに出来た作であるから、おのづからその情調に於て親しく相通するものがある。

有明詩集

定價參圓五拾錢



印刷日 十月六年一十正大
發行日 十月六年一十正大

七

雄 隼 原 蒲 者 著

著者代表スルア社會費合

雄 鐵 原 北 者 行 發

號ノ地初町張尾座銀且圖京市京東

郎 太 源 本 山 行 刷 印

五馬町墨久區川石小區京東

子 金 本 製

發 行 所

東京橋區
銀座尾張町

會社
ア
ル
ス

電話銀座二一九三番
振替東京二四八八番

北原白秋氏著 民謡集 **日本の笛** 定價貳圓八拾錢
書留送料十八錢

北原白秋氏著 詩集 **白秋詩集** 全二卷 定價各二圓八十錢
書留送料各十七錢

北原白秋氏著 小唄集 **白秋小唄集** 定價壹圓八拾錢
書留送料拾參錢

北原白秋氏著 小抒情 **わすれな草** 定價壹圓八拾錢
書留送料拾參錢

北原白秋氏著 **祭の笛** 定價貳圓八拾錢
書留送料拾七錢

三木露風氏著 詩集 **象徴詩集** 定價貳圓八拾錢
書留送料拾八錢

萩原朔太郎氏著 詩集 **月に吠える** 定價貳圓五拾錢
書留送料拾七錢

嵯原朔太郎氏著 情學緒 **新しき欲情** 定價貳圓八拾錢
書留送料拾八錢

室生犀星氏著 詩集 **室生犀星詩選** 定價貳圓貳拾錢
書留送料拾七錢

日夏耿之介氏著 詩集 **黑衣聖母** 定價貳圓五拾錢
書留送料拾七錢

新詩會編 現代詩集 第一輯 定價貳圓五拾錢 書留送料拾八錢

牧神會編 牧神詩集 第一輯 定價貳圓貳拾錢 書留送料拾七錢

古泉千樞氏編 歌論 竹里歌話 定價貳圓八拾錢 書留送料拾九錢

北原白秋氏著 歌話 洗心雜話 定價壹圓八拾錢 書留送料拾五錢

上田敏氏選註 小唄 定價壹圓八拾錢 書留送料拾參錢

竹友藻風氏譯 エルレエヌ選集 定價壹圓參拾錢 書留送料拾壹錢

堀口大學氏譯 サマン選集 定價壹圓五拾錢 書留送料拾壹錢

矢野峰人氏譯 シモンズ選集 定價壹圓六拾錢 書留送料拾壹錢

山宮充氏譯 ブレイク選集 定價壹圓六拾錢 書留送料拾壹錢

日夏耿之介氏譯 英國神秘詩鈔 定價壹圓六拾錢 書留送料拾壹錢

トイ2Y-44

北原白秋氏著

童話集

とんぼの眼玉

定價壹圓九拾錢
書留送料拾五錢

北原白秋氏著

童話集

兎の電報

定價壹圓九拾錢
書留送料拾五錢

北原白秋氏譯

英國童話

まざあぐらす

定價貳圓八拾錢
書留送料拾七錢

三木露風氏著

繪入童話

眞珠島

定價貳圓八拾錢
書留送料拾七錢

竹友藻風氏譯

波斯古詩

ルバイヤット

定價壹圓參拾錢
書留送料拾壹錢

終